ロイヤル・アカデミーにおける英国水彩画家の展示戦略
――「英国水彩画の父」ポール・サンドビーのメディウムの選択意図――

山口　美帆（慶應義塾大学）

18 世紀後半の英国では大陸諸国に先駆けて水彩画が隆盛し、大衆へ普及していた。その背景には、産業革命による画材の発達や旅行の流行による風景の記録に対する需要の高まりなどがある。1768 年創立のロイヤル・アカデミー（Royal Academy of Arts）年次展覧会においても多くの水彩画が出品され、1804 年には水彩画家協会（Society of Painters in Water Colours）が設立されるまでに至った。しかしながらアカデミーの実情は異なるものであった。油彩優位のアカデミーでは水彩画家の地位は低かったのである。本発表では、アカデミー創立メンバー唯一の水彩画家であり「英国水彩画の父」と称されるポール・サンドビー（1730/31-1809）の活動を通して、アカデミーにおける水彩画家の展示戦略について考察する。とりわけサンドビーの 1794 年出品作≪ワットマン氏のターキー製紙工場を望む、ケント州ボクスリーのヴィンターズの眺め≫（イェール英国芸術センター蔵）を取り上げ、作品の注文経緯、メディウム、技法と、アカデミーの制度及び展示室の状況とを照らし合わせることにより画家のメディウムの選択意図を探る。

本作品は製紙業者ジェイムズ・ワットマン 2 世から注文を受け、ワットマンの製紙工場及び私有地を描いた作品である。支持体はその工場で作られた大型のウォーヴ紙で、透明水彩絵具に適する紙として当時評判を得た。しかし、そのウォーヴ紙に透明水彩絵具ではなくグワッシュを用いたサンドビーの選択が先行研究で疑問視されている。これに対し発表者はグワッシュの選択意図は、油彩優位のアカデミー展示室を想定した画家の展示戦略であると捉える。

18世紀のアカデミーにおいて、展覧会の中心となるグレイト・ルームには主に油彩画が飾られ、水彩画は一部の油彩画と共に狭い部屋に展示されていた。さらにその部屋の中でも、油彩優位のヒエラルキーや作品のサイズ等の判断材料から、油彩画は最も鑑賞者の注意を集める位置にある壁面の「ライン」上に飾られやすいのに対し、水彩画は「ライン」から離れた位置に飾られる傾向にあった。しかし発表者が当時の展示見取り図と展覧会カタログを調査した結果、1794年の展覧会に出品された本作品が、「ライン」周辺に展示されたことが判明した。そこで発表者は本作品のサイズと画家のグワッシュの使用へのこだわり及び展示場所を鑑み、サンドビーがアカデミー展覧会における制度的枠組みに則り、水彩画の中では透明水彩よりも油彩画に近い評価を得る可能性のあったグワッシュを戦略的に選択したことが、この展示場所の獲得につながったという解釈を提示する。そしてこのサンドビーの実践を、水彩画軽視のアカデミーにおける水彩画家の格闘を示すと同時にヒエラルキーからの解放を求めて設立された水彩画家協会へつながる活動として捉える。